

防災ダンスの有用性についての研究

－防災活動のイメージ変容に着目して－

吉村 利佐子 (岡山大学)

1. 背景と目的

これまで防災活動は、「堅苦しい」などの負のイメージが抱かれる傾向にあり、防災活動を阻害する要因として問題視されてきた。それに対して、学習者が積極的に取り組めるよう、ゲーム等の「楽しさ」を喚起する多様な防災教育アプローチが模索されている。こうした中で、本研究では「楽しさ」を喚起する手段としての「ダンス」の可能性に着目した。ダンスを用いた防災教育教材（防災ダンス）を新たに開発し、学習者が抱く防災活動に対するイメージに影響を及ぼすかについて検討を行った。具体的には、以下の3つの仮説検証に取り組んだ。

仮説 a：防災ダンスの実施により防災活動のイメージは肯定的に変容する。

仮説 b：防災ダンスはオンラインのみより対面での実施を加えた方が防災活動のイメージをより肯定的に変容させる。

仮説 c：オンラインに対面を加えた実施において、防災活動のイメージの肯定的変容は、特にダンスに対して肯定的な態度を持つ者にみられる。

2. 研究方法

(1) 分析対象者：大学生 151 名をオンラインのみで学習するオンライン群と、オンラインに対面での実施を加えて学習する対面群に割り当てた。

(2) 使用教材：「ぼうさい PiPit! ダンス」^{注)}

(3) 手続き：事前調査として、防災活動のイメージ調査と、ダンスに対する態度調査を行ない、その後、オンラインを用いて防災ダンスを実施した。対面群は対面での実施を加えたのち、両群ともに事後調査として防災活動のイメージ調査を行なった。

(4) 質問項目：防災活動のイメージの測定には、防災活動を形容する 12 対の形容詞について SD 法を用いた 5 件法により回答を求めた。否定的な形容詞を 5 点～肯定的な形容詞を 1 点として得点化した。ダンスに対する態度調査では、好感度・羞恥心・

抵抗感について 5 件法を用いて調査を行った。

3. 結果と考察

合計得点について混合 3 要因分散分析を行った結果 (図 1)、実施方法×防災ダンスの交互作用 ($F(1, 138) = 4.04, p < .05$)、防災ダンスの主効果 ($F(1, 138) = 21.95, p < .001$) において有意な結果が示された。単純主効果検定を行ったところ、対面群において事前よりも事後の方が得点が有意に低かった ($F(1, 140) = 22.62, p < .001$)。これより、仮説 a と b は支持され、仮説 c は支持されない結果となった。よって本研究では、防災ダンスは学習者の防災活動イメージを肯定的に変容させること、対面授業を取り入れた実施が望ましいこと、学習者のダンスに対する態度は防災活動イメージの変容に影響しない可能性が高いことが明らかになった。

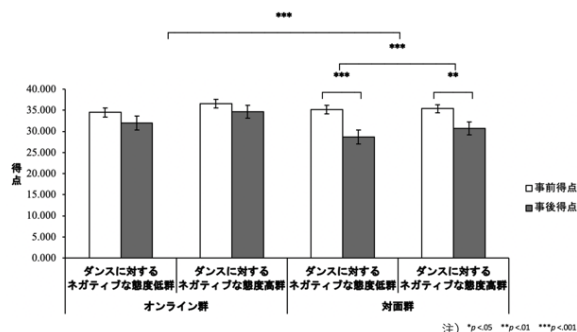


図 1 合計得点についての分散分析の結果

注) 2019 年度より産学官連携体制 (岡山大学－岡山市－こくみん共済 COOP 中四国統括本部) で開発した防災ダンス教材の 4 つの映像教材を使用 (図 2)。本教材の開発や普及啓発活動の取り組みは、2019 年度岡山市学生イノベーションチャレンジプロジェクト審査員特別賞・2020 年度「ぼうさい甲子園」UR レジリエンス賞などの評価を獲得している。



図 2 映像教材のアクセス QR コード